

令和 5 年 6 月 1 日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19K01473

研究課題名(和文)17世紀ブリテンにおける王権と君主主義

研究課題名(英文)Kingship and Monarchism in the Stuart Britain

研究代表者

木村 俊道(KIMURA, TOSHIMICHI)

九州大学・法学研究院・教授

研究者番号：80305408

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究においては、「王権」と「君主政」の観点から、「長い17世紀」におけるイギリス政治思想史の見直しが試みられた。なかでも、ジェームズ6世・1世から、その息子のヘンリとチャールズ(のちの1世)、そしてチャールズ2世へと続く君主論と統治論の展開の一端が明らかとなった。その成果はとくに、単著『想像と歴史のポリティクス』(風行社、2020年)や、論文「王権と君主の「ルネサンス」ヘンリ・ステュアートと統治のアート」(『法政研究』第88巻第2号、2021年)などに反映されている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

17世紀のイギリスはこれまで、ピューリタン革命や名誉革命などを通じて近代的な政治思想が形成された時代とみられてきた。本研究の学術的・社会的な意義は、王権や君主政の重要性と持続性に着目し、デモクラシーや自由主義、立憲主義や共和主義、あるいは近代国家の発展とは異なる、「ステュアート王朝」における統治の実践を可能にした「君主主義」の政治学や「ブリテン」の君主論の思想史的な意義を明らかにしたことにある。

研究成果の概要(英文)：During this research period, it was attempted to revision the British political thought in the long seventeenth century in terms of kingship and monarchy. In this project, some aspects of the development of political discourses on the prince and government (especially from King James VI & I, Prince Henry, Charles I, to Charles II) was explored.

These research achievements are disclosed in my book (Politics of History and Imagination: Humanism and the British Empire, Fukosha, 2020) and articles (ex. 'Renaissance of the Kingship and Prince: Henry Stuart and the Art of Government', Hosei Kenkyu, vol. 88, no. 2, 2021, pp. 511-544).

研究分野：西洋政治思想史

キーワード：ブリテン 王権 君主政 ジェームズ1世 君主主義 統治

1. 研究開始当初の背景

王権や君主政は、デモクラシーが普遍的な理念となった現在でもなお、一定の存在感を有している。君主政を採用している国は現在、ヨーロッパに限っても7か国にのぼる。その一方で、王権や君主政はまた、古代エジプトやバビロニア、古代中国などに遡る最古の歴史を有している。したがってそれは、少なくとも20世紀前半に至るまで、世界の歴史と政治、そして人間の情念を動かしてきたと考えられる。

これに対して、既存の西洋政治思想史研究においては、近代デモクラシーや自由主義、立憲主義の発展、あるいは近代国家の成立や共和主義の展開などに注目が集まり、王権と君主政の重要性はほとんど顧みられることはなかった。

2. 研究の目的

しかし、少なくともフランス革命以前の、16世紀から18世紀にかけての「初期近代」の西洋政治思想は、王権と君主政をめぐる一連の政治的な言説やレトリックに彩られていたのではない。とりわけ、イギリスは、近代デモクラシーや自由主義、議会政治のモデルと見なされる一方、現在に至るまで王権と君主政を維持してきた。これらの経験は、王権と君主政の持続性や復元力、あるいは思想的な強靭さを示すだけでなく、一定の政治的な思考の成熟をもたらしたのではない。

本研究は、以上のような背景や問いを踏まえ、ジェイムズ6世・1世からアン女王に至る「ステュアート王朝」=「長い17世紀」におけるブリテン政治思想を、王権や君主政の観点から新たに読み替えることを目的とした。そのうえで、本研究では、ホップズやロックの社会契約論やコモンローヤーの国制論、共和主義などとは異なる、「君主主義」の政治学や「ブリテン」の君主論、そして、王権や君主政を支えた「統治の秘密」の一端を明らかにすることが試みられた。

3. 研究の方法

本研究においては、西洋政治思想史、とりわけ初期近代のブリテン政治思想に関する一次資料が主な研究対象となる。これについては、九州大学図書館において平成28年度の学内大型図書購入予算を用いて購入されたデータベースEEBO (Early English Books Online)、および、同様に平成27年度の学内の大型図書購入予算や部局の予算を用いて購入された「初期近代英国政治思想史コレクション」が活用された。

なお、九州大学が所蔵しない図書や資料、データベースについては、国内外の大学図書館での閲覧・収集・調査・利用を予定していたが、コロナ禍によって移動が制限され、ほとんど実施できなかった。

4. 研究成果

(1) 本研究の成果の一部は、2020年に出版された単著『想像と歴史のポリティックス 人文主義とブリテン帝国』(風行社)に織り込まれた。本書では、帝国や人文主義に関する以前からの研究を踏まえつつ、古代ギリシアから現代にかけての西洋政治思想史における王権や君主政の重要性が強調されるとともに、ルネサンス期から王政復古期にかけて展開された君主主義の伝統や、「文明化された君主政」を支えたフランシス・ベイコンからハリファックスに至る顧問官の政治学の所在が指摘されている。

なかでもジェイムズ6世・1世については、彼の『自由な君主政の真の法』や『バシリコン・ドロン』、議会演説、書簡などを通じて、テューダー朝からステュアート朝への王朝交代やイングランド王位の継承、そしてイングランドやスコットランド、ウェールズ、アイルランドなどを含む複合君主国の統治を可能にした政治学の展開の一端が明らかとなった。

また、ジェイムズ期のアイルランドの法務長官であったジョン・デイヴィスの大権論や統治論については、竹澤祐丈・岩井淳編『ヨーロッパ複合国家論の可能性 歴史学と思想史の対話』(ミネルヴァ書房、2021年)に掲載された拙稿「複合国家ブリテンにおける征服と植民 ジョン・デイヴィス小論」において考察がなされた。

(2) こうした作業とともに、王権や君主政、初期近代イングランドに関する最近の研究動向を把握するため、『パトリアーカ』の著者であるロバート・フィルマーの研究書(古田拓也『ロバート・フィルマーの政治思想』)の書評(『政治思想研究』第20号、2020年)や、キース・トマスによる初期近代イングランド研究(In Pursuit of Civility)の書評(『イギリス哲学研究』第43号、2020年)を寄稿した。さらに、『啓蒙思想の百科事典』(丸善出版、2023年)の項目「社交性」を執筆することにより、君主国家における宮廷文化の重要性が再確認された。

(3) 本研究ではまた、ジェームズの長子である皇太子ヘンリの存在に新たに着目した。さらに、ヘンリの家庭教師やベイコンなどに加え、劇作家のベン・ジョンソン、エンブレム・ブックの作者であるヘンリ・ピーチャム、歴史家のジョン・ハイワード、海外事情の助言者であったロバート・ダーリントンなどを対象に加え、ヘンリの宮廷を舞台とする君主教育論の解明を試みた。

その結果、ジェームズの『バシリコン・ドロン』に加え、ブリテンの伝説や騎士道の理念、そして人文主義的な教養に育まれた政治思想の再生産の過程が明らかとなった。また、それに併せて、各種の儀式や式典、仮面劇、エンブレム、アフォリズムといった、視覚的・言語的なアートが果たした役割についても新たに検討がなされた。ヘンリをめぐる政治思想には、君主政を常態とする時代の言説とともに、ジェームズからチャールズ1世、あるいはチャールズ2世へと至る、王権や君主の再生を可能にする統治のアートが隠されていたと考えられる。

以上の成果は、「王権と君主の「ルネサンス」—ヘンリ・ステュアートと統治のアート」と題して九州大学政治研究会において報告されるとともに(2021年6月19日)、同名の論文が『法政研究』第88巻第2号(2021年)511-544頁に掲載された。このような、政治思想史の観点から皇太子ヘンリに着目した研究は、管見の限り、少なくとも国内では例がないように思われる。

(4) 以上に加えて、本研究では、もう一人の「プリンス」であったチャールズ(のちの1世)にも焦点を当て、Aysha Pollnitzによる君主教育研究や、Kevin SharpeやRichard Custをはじめとするチャールズ研究、Malcolm Smutsなどによる同時代の宮廷文化研究といった先行研究の調査を行った。また、一次資料に関しては、ジェームズがチャールズに宛てたA Meditation(1619)や、チャールズの処刑後に出版されたEikon Basilike、そしてウォルター・ローリの作とされる『君主論』(『国家のマキシム』)などの重要性が明らかとなった。さらに、チャールズの宮廷に着目することによって、ジョンソンらによる戯曲や仮面劇、あるいはルーベンスやヴァン・ダイクらによる絵画といった、君主政における「アート」の政治思想的な役割など、今後の研究の課題や新たな展望が見えてきた。

(5) なお、本研究においては、コロナ禍のために、予定されていた国内外での資料収集や調査が実施できなくなるなど、当初の計画の変更や延期等を余儀なくされた。しかし、このことは他方で、ジェームズ6世・1世期や王政復古期における疫病・ペスト対策や、上記の研究を通じて新たに着目するようになった統治のアートに対する関心を期せずして促すことになった。

これについては、関連する報告を、「パンデミック以降の政治思想」をテーマとした政治思想学会のシンポジウムで行った(「政治思想の「振舞い」—統治のアートとシヴィリティをめぐる」2021年5月22日)。また、同名の論文を『政治思想研究』第22号(2022年)96-122頁に発表した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 木村俊道	4. 巻 88
2. 論文標題 王権と君主の「ルネサンス」 ヘンリ・ステュアートと統治のアート	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 法政研究	6. 最初と最後の頁 71-104
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15017/4705303	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 1件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 木村俊道
2. 発表標題 王権と君主の「ルネサンス」 ヘンリ・ステュアートと統治のアート
3. 学会等名 政治研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 木村俊道
2. 発表標題 政治思想の「振舞い」 統治のアートとシヴィリティをめぐる
3. 学会等名 政治思想学会（招待講演）
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 木村俊道	4. 発行年 2020年
2. 出版社 風行社	5. 総ページ数 299
3. 書名 想像と歴史のポリティックス 人文主義とブリテン帝国	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------